緑化樹木の情報誌
緑化通信
2025 2月25日（年６回25日発行）第509号

発行所
一般社団法人 日本植木協会
〒107-0052　東京都港区赤坂6-4-22　三沖ビル3階
TEL.(03)3586-7361　FAX.(03)3586-7577
URL：https://www.ueki.or.jp/　E-mail：honbu@ueki.or.jp
購読希望の方は上記宛へお申込み下さい。年間購読料　5,000円

ミックス 紙｜責任ある森林管理を支えています FSC® C008422
環境に配慮するためFSC®森林認証紙を使用しています。

創立55周年記念全国大会

創立55周年記念全国大会　佐久定規会長挨拶

会員の皆さまのおかげで創立55周年記念全国大会が開催でき、また、多くのご来賓のご臨席を頂き感謝申し上げます。

２０２７年国際園芸博覧会では、植物調達パートナーの認定を受け、協会としてこの上ない大きなチャンスを頂き、国際園芸博覧会は、我々植木業界をＰＲするとともに、協会員が一丸となり取り組んでまいります。

また、協会事業である「都道府県緑化樹木供給可能量調査」は、植物の育成状況や生産量を迅速に市場に伝え、業界の動向を把握し、業界全体の発展を支えるための重要な事業であります。

そして、啓蒙活動の一環として実施している「緑育出前授業」も重要な活動のひとつで、令和６年度現在、延べ約１７０００人に参加いただきました。子どもたちに植物に関する知識を伝え、未来の世代に美しい緑の日本を引き継ぐため、今後も積極的に活動を推進します。

創立55周年を迎えるに当たって、各省庁や各行政団体の方々と連携をさらに強化して、業界発展のために、より一層の努力をしていく所存です。

我々の「うえきのちから」を存分に発揮できるように、国民にＰＲできるように事業発展を考えています。今後も引き続き、会員の皆様のご協力をお願いしたいです。

結びとして、会員の皆様、各省庁や友好団体の皆様の発展の一歩となるよう、一緒に歩んでいく所存です。

大会宣言

一般社団法人日本植木協会は創立55周年を迎える。

近年、地球的規模での気候変動により世界の平均気温は上昇傾向にある。また、日本の年平均気温の上昇は世界平均よりも速く、地球温暖化の進行も顕著なものとなり私たちを取り巻く生活環境に大きな影響を与えている。

このような状況を踏まえ、我々は、創立55周年という節目の年に、今一度原点に立返り、我々の使命を再認識する。

「うえき」には「ちから」があり
満開の桜　夏の木陰の涼しさ　秋の紅葉と豊かな実り
厳しい冬には、北風を和らげてくれる

この様々な植木の恩恵が、国民生活にとって不可欠であることを改めて認識し、次世代へ繋いでいくため、会員が一致連携の下、緑化用樹木の生産、安定的な流通体制、持続可能な供給体制を強固にし、更には、緑化樹木の新たな価値の可能性を見出すなど、「緑」の潜在能力が発揮できるよう大きく躍進することを宣言する。

一般社団法人日本植木協会
創立55周年記念全国大会

環境省自然環境局長の植田明浩氏

農林水産省農産局園芸作物課花き産業・施設園芸振興室長の大塚裕一氏

林野庁長官の青山豊久氏

令和7年度通常総会後の14時30分から創立55周年記念全国大会を開催した。

生駒順副会長による開会の辞で開幕し、佐久定規大会会長が開催にあたっての挨拶を行った。

ご来賓から林野庁長官の青山豊久様、農林水産省農産局園芸作物課花き産業・施設園芸振興室長の大塚裕一様、環境省自然環境局長の植田明浩様よりご祝辞を頂いた。

協会顧問の有村治子参議院議員、同顧問の藤丸敏衆議院議員よりお祝いのお言葉を頂いたのち、ご臨席された多くの来賓の方の紹介が行われた。

次に、協会会長表彰があり、従業員永年勤続表彰、卓越技能者（名人）認定証、優秀技能者認定証、特別庭園樹木（名木）認定証の授与を行い、各受賞者には佐久会長から表彰状が授与された。

続いて、今夏に行われる参議院議員選挙にあたり協会顧問の有村治子参議院議員を候補者として推薦するにあたり、生駒副会長から推薦の弁を述べ、佐久会長から推薦状が授与された。

引き続き、辰巳広之副会長から大会宣言が行われ、石井新次副会長の閉会の辞をもって幕を閉じた。

特別庭園樹木（名木）左から佐久会長、柴田氏（北日本菅与㈱）

協会顧問の藤丸敏衆議院議員

協会顧問の有村治子参議院議員

一般社団法人　日本植木協会会長表彰等

左から佐久会長、高橋氏（代理）、内田氏、篠田氏、宇賀神氏（代理）、江連氏（代理）

従業員永年勤続表彰

○早矢	仕徹	宇賀神緑販㈱	栃木県
○飯島	健	㈲みどり産業	栃木県
○内田	實	㈱内田緑化興業	埼玉県
○木原	学	㈱埼玉植物園	埼玉県
○田村	孝	㈱埼玉植物園	埼玉県
○篠田	秀明	㈲森川園芸	千葉県

左から佐久会長、川原田氏、吉澤氏、藤原氏

優　秀　技　能　者

左から森川氏、池谷氏、小畑氏、大崎氏、森田氏（代理）、倉本氏

	支部	氏　名	社園名	分類	評価対象
1	千　葉	森川　雅広	㈲森川園芸	植物分類知識	県下有数のコニファー生産技術を有するとともに、実地経験による植物分類の知識に優れ、植物の撮影技術が秀逸。
2	静　岡	池谷　俊裕	池谷農園	繁殖挿木技術	生産技術を熟知し挿木、実生から品質管理に至るまでの全工程に精通し、特にチャノキの生産管理には定評がある。
3	静　岡	小畑　勝裕	㈲伸松園	造形仕立技術	生産技術や造形技術において高い専門性を有し、業務において成果をあげている。
4	愛　知	大崎　和生	㈱文化農園	植物生理生態知識	樹木医の資格を有し、植物生理生態知識にたけているとともに、ポット商品の多数生産、育成管理にも精通している。
5	愛　知	村田　利博	㈱レコムグリーン	育成管理技術	コンテナ苗木の生産・販売に長年携わり、実生・挿し木からの苗木を安定出荷する育成管理に精通している。
6	広　島	倉本　和男	㈱柏松園	育成管理技術	高品質な植物を見極める審美眼に知識量を用い、常に最適な注文にこたえられる育成管理を行っている。

卓越技能者（名人）

	都道府県	氏　名	社園名	分　類	評価対象
1	茨　城	川原田邦彦	確実園園芸場	植物分類知識	植物分類全般に精通し、特にアジサイ、フジ類の分類収集で顕著な成果を有する。
2	東　京	吉澤　信行	㈱小金井園	植物分類知識	樹木の同定（分類）知識、枝葉から樹木の同定（識別）を行う能力の正確性は随一の能力を有する。
3	岡　山	藤原　吉平	藤原園芸	育成管理技術	国内外のグランドカバー類は品質にこだわった生産を行い、全国販売を展開。
4	高　知	岡宗　信明	㈱岡宗農園	育成管理技術	暖地性の耐潮性樹種のコンテナ栽培者としてパイオニア的存在。

創立55周年記念講演会
16時～18時

講師　元農林水産事務次官　皆川　芳嗣　氏
「農福連携の可能性と花や緑への展開」

講師　皆川芳嗣 氏

農福連携とは、農（ノウ・自然、農林水産業）と、福（フク・人、福祉）の連携のことで、障害者の農業分野での活躍を通じて、農業経営の発展とともに、障害者の自信や生きがいを創出し社会参画を実現する取組で、事例の紹介等があり、（事例　農業経営体が障害者を雇用、a障害者視点で農作業の体制を整備したことで作業効率が進み経営規模と生産量が拡大。b障害者雇用数に比例し売上増加。）、植木業界でも人材確保について今後の参考となる講演でした。

講師　一般社団法人公園からの健康づくりネットワーク　業務執行理事　小野　隆　氏
「身近なみどりと私たち」

講師　小野　隆 氏

2050年には世界人口のおよそ7割が都市に居住するようになり、ただ、人口が減少する日本では、どの世代も生き生き生活できる社会をどのように創っていくかが問われている。20世紀後半から特に今世紀に入って人と自然の関係についての研究が進み、そして改めて日本の文化、森の国の在りようについて世界が希望をもって注目していることについて、WHO施策提言レポートやそれに伴う各国の施策が紹介され、木々と私たちの関係についての講演で、まさに、「うえきのちから」に関連する講演でした。

意見交換会

18時15分から意見交換会が行われた。関東・甲信越ブロック副ブロック長の瀧沢正己氏の歓迎の挨拶、林野庁森林整備部長の長﨑屋圭太氏、国土交通省大臣官房審議官（都市生活環境課・国際園芸博覧会担当）の鎌原宜文氏にご挨拶を賜り、（一社）日本公園緑地協会会長の高梨雅明氏に乾杯のご挨拶を頂いた。ご来賓の方々を含め154名が参加し、交流を深める貴重な機会となった。

（一社）日本公園緑地協会会長の高梨雅明氏

国土交通省大臣官房審議官の鎌原宜文氏

林野庁森林整備部長の長﨑屋圭太氏

東京支部長の佐野栄信氏

副ブロック長の瀧沢政己氏

令和7年度 通常総会

令和7年1月21日㈫、東京都千代田区　都市センターホテルにて、（一社）日本植木協会は、令和7年度通常総会を開催した。

【総会前（第2回）理事会】

令和7年度通常総会の開会に先立ち、総会の運営の確認等を図るため総会前（第2回）理事会を開催した。出席者は会長、副会長、理事及び事務局。議事は通常総会の運営を図ることとした。

【通常総会】

開会に先立ち、事務局より定足数の確認が行われ、会員数387名のうち出席113名、委任状出席139名計252名で会員数の過半数を満たしていることの報告があった後、辰巳広之副会長による開会の辞で開幕した。

引き続き、令和6年度にご逝去された会員に黙祷を捧げた。

続いて、佐久定期会長が通常総会開催にあたっての挨拶を行った。

【議長団等選出】

議長団は、議長に飯島裕之氏（大和園／神奈川県）、副議長に瀧沢政己氏（㈱清紫園／群馬県）が選出され、議事録署名人には髙橋慶治氏（㈲染谷植物園／埼玉県）、佐野栄信氏（佐野園／東京都）が選出された。

【審議事項】

①第1号議案　令和6年度決算及び監査報告

議長は、第1号議案について事務局に説明を求めた。

事務局は、第1号議案について財務諸表に基づき説明を行った。

引き続き議長から、監査報告を求められ、小畑勝裕監事が、令和6年度決算は適正に処理されていて、経費の使途についても正当であると報告された。

また、執行部からの業務内容についての報告を受けて、要望として、2027年国際園芸博覧会の業務については、当協会として非常に大きなチャンスで、業界をPRする絶好な機会であるので積極的に行って欲しいこと。慎重に行うべきことは慎重に行い信用失墜行為等が無いよう意見として付け加えたことも併せて報告された。

議長は、説明を受け議場に諮ったところ、意見なく賛成多数をもって承認された。

②第2号議案　役員の選任

議長は、役員の選任について事務局に説明を求めた。

事務局は、役員を選任しなければならない旨を説明し、役員推薦委員会の小島幹央委員長が左記の役員候補者を提案した。

（理事候補者　1名）
太田和也

議長は、この提案を受け議場に諮ったところ候補者が承認された。

【報告事項】

①令和6年度事業報告

議長は、令和6年度事業報告について事務局に説明を求めた。

事務局は、議案書に基づき令和6年度事業報告の説明を行った。

議長は、説明を受け議場に諮ったところ、質問等はなかった。

②令和7年度事業計画及び収支予算

議長は、令和7年度事業計画及び収支予算について、事務局に説明を求めた。

事務局は、議案書に基づき令和7年度事業計画の説明を行った。

また、生駒順副会長より、2027年国際園芸博覧会事業について左記の説明を行った。

●一つ目は、植木協会員が博覧会へ植物を調達・納品する2023年度契約分がある。2024年度分が今月末に契約できる予定で、103品目の植物の調達・納品の契約となる予定である。

●二つ目は、博覧会協会が自ら出展するエリアに、設計会社や広告代理店とチームを組んで、植物の提供、植木の実演や植木の造園を併せて行うことの依頼があり、現在、当協会が案を提出しているところで正式契約には至っていない。

●三つ目は、屋外出展（約200㎡）の出展者として内定され展示を計画しているところ。屋外出展は当協会の自費となる。

続いて、事務局は、正味財産増減計算書に基づき令和7年度収支予算について説明を行った。

また、佐久定規会長より、実施事業引当預金について左記の説明を行った。

2027年国際園芸博覧会事業での屋外出展を行う際には、固定資産の「実施事業引当預金」の一部を使用する旨報告された。なお、国際園芸博覧会事業が終了し利益が出た場合には「実施事業引当預金」に繰り入れることを併せて報告された。

議長は、説明を受け議場に諮ったところ、質問等はなかった。

議長は、審議事項及び報告事項が終了したことを宣言して、議長団は退任した。

●次期通常総会の開催地について

事務局より、令和8年度通常総会開催地について、令和8年1月に関西ブロックで開催すると報告された。

開催地の関西副ブロック長の勝山明彦氏から歓待の挨拶があった。

●青年部会紹介

田宮慎二青年部会長の挨拶及び青年部の活動状況について報告された。

●賛助会員紹介

賛助会員の紹介及び賛助会員が提供している商品等の紹介があった。

●閉会宣言

石井新次副会長が閉会を宣言した。

左から議長の飯島氏、副議長の瀧沢氏

会員動向

電話・メールアドレス変更

▷㈲舟引植産
▷㈱ 0247-81-2622
shokusan@hyper.ocn.ne.jp

訃　報

▷川津エミ子　様
（川津富夫氏のご母堂様）
川津園芸
令和７年１月10日没　享年96歳

▷田村　規　様
（田村政則氏のご母堂様）
㈲田村山林緑化農園
令和７年１月15日没　享年90歳

コンテナ部会

令和7年度通常総会

令和7年度コンテナ部会通常総会は1月22日㈬9時より、東京都千代田区の都市センターホテルで開催されました。部会員32名及び協会員、協力会9名の出席を得て、司会の岩田悠揮幹事の開会宣言により総会が進行しました。

先ず、松村幹子部会長が挨拶に立ち、業界環境が厳しい中ではあるが、コンテナ部会は創意工夫をもって役立つ新しい情報の収集・発信に努めていきたいと抱負を述べました。

次に来賓として、佐久定規（一社）日本植木協会会長が挨拶され、①コンテナ部会が取り組んでいるボタニカル・ジンについて、協会は通信販売酒類小売業免許取得等のサポートを図っている、②2027年国際園芸博覧会では出展協力をお願いしたい等の話をされました。

多くの出席者で埋まった総会

佐久定規協会長の挨拶

担当理事の黒田晴彦理事は、協会と部会がより密接に活動できるよう、調整を進めていきたいと語りました。

【総会議事】

新潟県支部の㈱畠山種苗園の畠山富夫氏が議長に推薦され、承認されました。

続く議事録署名人の選出では、㈱備藤園の備藤貴大氏と㈲森川園芸の森川雅広氏が推薦され、承認されました。

第1号議案令和6年度事業報告及び第2号議案令和6年度決算報告及び監査報告

各委員長からの主な事業報告は以下の通りです。

抱負を述べる松村部会長

議長の畠山富夫氏

①広報・普及委員会…SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）の本格運用を開始。

②調査・研究委員会…コンテナ樹木及びグラウンドカバープランツの供給可能量調査と難易度判定を進めた。

③HANAYAGIプロジェクト小委員会…第2弾のボタニカル・ジンの製作・販売準備に取り組んだ。

④生産技術・研修委員会…10月に45名が参加し、茨城県で国内研修会を実施した。

続いて事務局が令和6年度決算内容を報告し、黒田剛監事より適正な会計処理が行われているとの監査報告がなされました。

議長は第1号議案と第2号議案について出席者に諮ったところ、出席者より①ボタニカル・ジンの製造本数や費用、収益の考え方、②ボタニカル・ジンの継続性等について質問がありました。恒石委員長はリスクを考慮し、今回は500本を取り扱う他、黒字を前提とした値付けにすることや今後シリーズ化することで安定収益を目指す方針と回答しました。

質問が出尽くしたことから採決を行い、賛成の拍手で第1号議案及び第2号議案は承認されました。

第3号議案令和7年度事業計画（案）及び第4号議案令和7年度収支予算（案）

事業計画(案)の注力すべき活動として、①総務会はHANAYAGIプロジェクト小委員会を総務会傘下に置き、意思決定を迅速化する、②広報・普及委員会はソーシャル・ネットワーク・サービスのさらなる活用を図る、③調査・研究委員会は供給可能量調査、生産数量調査の実施を通じて植物の流通データの精度を高める、④生産技術・研修委員会は国内研修会の実施や勉強会の開催について説明を行いました。

令和7年度収支予算(案)は、事務局より説明がなされました。

出席者からは2027年国際園芸博覧会におけるコンテナ部会の取り組みについて質問がありました。議長は第3号議案及び第4号議案について出席者に諮ったところ、賛成の拍手で承認されました。

審議事項がすべて終了したことから畠山議長は退任しました。

その他・報告　各賞受賞者紹介

事務局より優秀技能者、卓越技能者、従業員永年勤続表彰について報告があり、拍手を持って栄誉を称えました。

次に部会に入会された㈱プラディオの大作正氏、協力会に入会された㈱サンホープの原宏氏が抱負を述べられ、続いて協力会の方々が自社商品のピーアールを行いました。

最後に川村副部会長が閉会の辞を述べ、総会は滞りなく終了しました。

【記念講演】

記念講演会　織田圭介先生

10時35分より森ビル㈱設計部の織田圭介氏による記念講演**「森ビル・麻布台ヒルズのみどりについて」**が行われました。

森ビルはこれまで単なるビル建設を進めるのではなく、周辺インフラや緑地など環境を含めた大規模な都市開発を理念としてきました。都市をつくり、都市を育む視点を大切にしてきたのです。

令和5年に街開きした麻布台ヒルズはグリーン（圧倒的な緑）とウェルネス（人間らしく生きられる空間）をコンセプトとして起伏に富んだ地形を生かした開発を行っています。グリーンでは在来種を主体とした植生の変化を楽しむ植栽を計画し、サクラのゲートや果樹園・菜園、約520mに及ぶ雑木林の街路樹、屋上緑化など各エリアに特徴をもたせた植栽を行っています。

昭和61年のアークヒルズ竣工以降、主要ヒルズの緑被面積は麻布台ヒルズ竣工で10haに達しています。近い将来には12haまで緑被面積が拡大する見通しです。

麻布台ヒルズのみどりの維持管理では、外注先の造園会社3社の管理作業のクオリティが共通化できるよう、植栽管理ガイドラインを策定しています。

こうした森ビルの取り組みは、次の六本木5丁目プロジェクトでも構想され、都市をつくり、都市を育むという理念が連綿と継承されると織田氏は講演を結びました。

参加者は森ビルのみどりを重視する都市開発理念に触れ、大変内容の濃い講演会で満足度は極めて高かったと感じました。

【総務会懇談会】

12時30分より総会会場でコンテナ部会役員、担当理事、協力会5社が参加して懇談会が開催され、各社園や各社の近況や情報交換を行い、13時30分に全ての行事が終了しました。

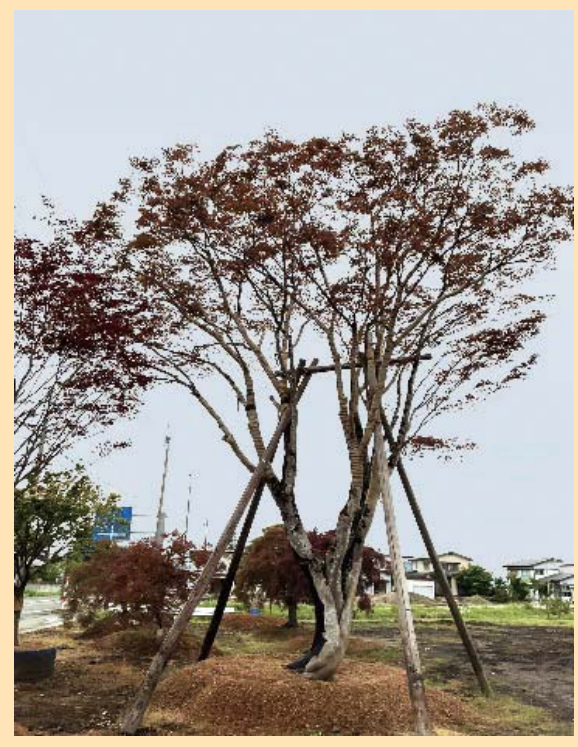
協力会の商品紹介

令和６年度「特別庭園樹木（名木）」を認定

北日本菅与㈱ 菅原勝利（秋田県横手市）３本

①カツラ　樹形：自然形
樹高8.00m　幹周6.50m　枝張7.00m
樹齢300年　認定番号240501

②ヤマモミジ　樹形：自然形
樹高11.50m　幹周2.95m　枝張10.00m
樹齢150年　認定番号240502


③ノムラモミジ　樹形：自然形
樹高11.00m　幹周2.35m　枝張10.00m
樹齢130年　認定番号240503

青年部会
幹事・支部等合同会議開催

令和6年7月11日㈭13時から東京都銀座の全国燃料会館会議室にて、支部長合同会議を対面にて開催した。田宮慎二部会長をはじめ、持田瑛太郎副部会長、松山真一副部会長、江原史丈幹事、宍倉聡一幹事、大島淳一幹事、横田圭一幹事、山内佑斗幹事、山中康太幹事、梶村建太幹事、大内新太郎支部長、荒井秀史支部長、善林雄士支部長、書間智嗣支部長、小林祐輔支部長、北井昭裕支部長、五十嵐大輔支部長、小泉吉永支部長、加藤時生支部長、若生剛支部長、久光泰輔支部長、松園康弘支部長、そして担当理事辰巳広之氏、事務局が参加した。支部長2名が欠席。

最初に各支部長が自己紹介をし、議題「今後の青年部会について」に入った。江原総務委員長のリードのもと、青年部で今後実施すると面白く、参加意欲が沸くような事業のアイデアを出し合うことをブレインストーミング方式で実施し今後に繋げる議論を行った。

議題①これまでの検討について

全国幹部の人数は、東日本／九州Bが1名減となり、8名になることもあり得る。

議題②各ブロックの幹事選出についての検討状況

東日本ブロック　幹事選出については東日本のブロック役員で話し合って決めていく予定。

中日本ブロック　ブロック長2年、全国幹事4年任期で選出する予定。各支部の人員との兼ね合いで負担を考えながら選出していきたい。

中四国ブロック　人員不足で支部では活動しておらず、ブロックで活動している。来年度以降どこかのブロックに合併して活動していく予定で、合流先は未定。

九州ブロック　全国幹事は、この人が適任と思う方に声かけしてお願いしていくつもりだ。

議題③グループワーク「青年部で面白くて参加したいと思うような事業のアイデア」

グループワーク発表

グループA
・ここ10年くらい海外視察に行けてないので、海外視察に関するアイデアが多くでた。
・共有情報として畑の在庫や新樹種の情報を皆で共有できるようにして、各会員の収益を図る
・広報として、協会員向けのSNS等、有名なアンバサダーを設置する
・協会でパテントをとった植物を開発する
・協会員で共同購入したり全国便を作ったり、協会加入のメリットがあるような取り組みを進める

グループB
・緑育、異業種交流会、後継者の育成・確保。
・海外研修、機械化・効率化した圃場を見に行ったり体験する。
・年会費以外の収入源を考える。
・インフルエンサーに認知度を上げてもらう。
・植木生産にかかわる情報の研究及びデータの集約化として、大学等研究機関と協調して学会等で発表する。

グループC
・協会内で植物を融通しあえる環境の構築を計る。
・緑育を通した人材を確保する。
・職人の技術の継承と人材育成（教育）をする。
・協会で事業性のあるものを協会員で出資して企業を作る。
・後継者問題として、真面目な企画として婚活事業を行う。
・認知度、会員数の向上、出資金を集めて、一方向に向かって進むような事業を検討する。

グループD
・海外研修に行きたい。
・植木生産の技術を後世に継承していかないといけないので、全国各地から人や情報の収集をして研修を開催する。
・植木協会の「誕生日365日の木」を他団体にも周知して、併せて緑育の体験キットを配布する。
・物価本の植物の扱いを再考してもらう。
・著名人に植木の生産や圃場等を生かして、アピールしてもらう。

田宮部会長総括
幹事だけでは思いつかない、すぐに実現できるようなアイデアもありました。堅苦しくない雰囲気でざっくばらんなアイデアが出たので、さっそく実現できることがあれば、提案の1つぐらいは現実に実行できるよう引き続き検討していきたい。

令和6年度
第6回理事会を開催

令和6年11月21日㈭13時15分から協会会議室において、理事12名及び監事2名（リモートを含む）出席のもと第6回理事会が開催された。

議事の内容は次のとおり。

【審議事項】

●**会員の承認について**

株式会社プラディオ（代表取締役　大作正氏）から正会員加入申込書があり茨城県支部長及び正会員2名からの推薦を受け提出され、審議した結果承認された。

●**理事会推薦理事の承認について**

役員推薦委員会委員長の小島幹央理事より第5回理事会（令和6年9月26日開催）後に委員会を開催、満場一致で事務局長（太田和也氏）を理事会推薦理事とすることが報告され、理事会で審議した結果承認された。理事としての選任は、翌年1月21日の通常総会の議事として審議されることで了承された。

【協議事項】

●**優秀技能者等の選定について**

優秀技能者6名の候補者について、選定された。

【報告事項】

●**特別庭園樹木（名木）認定者の報告**

佐久定規会長から令和6年度は3点認定され、当該3点は、全て、秋田県横手市の生産地、生産者は、北日本菅与株式会社（菅原勝利氏）と報告された。

●**コンテナ部会事業（収益事業）に係る酒類販売免許申請について**

前回理事会以降の進捗状況について事務局から左記の説明があった。

①酒類販売管理者の選任義務として、事務局長（太田和也氏）が酒類販売管理研修を受講し管理者となった。

②コンテナ部会が行う業務（仕入れ、ECサイトの管理、発送業務）については、部会役員で検討している。

③酒税の支払いについては納税者は酒造会社となり植木協会は義務を負わない。

●**2027年国際園芸博覧会の現状等について**

生駒順副会長より、国際園芸博覧会の現状等について左記のとおり報告された。

①2023年度の植物の調達・育成管理業務の委託契約の他、2024年度の植物の調達・育成管理業務の委託契約について調整を行っており、調整が終了後の翌年1月には見積書を提出し契約される予定となっている。

②博覧会協会主催の「花屋敷」の展示に係る植栽等にあたって協会へ協力依頼があり、提案しているところ。正式契約はできていない。

③屋外出展「花・緑出展」第一次内定出展者として選出された。これについては、協会の自費となる部分である。

●**会員の現状調査について**

前回理事会から一部修正を行い会員の現状調査については了承された。

各理事から各ブロックでの説明においても意見は無かったとの報告が有り、未開催ブロックは、質問・意見を集約し、次回理事会に報告することとなった。

令和7年度
第1回理事会を開催

令和6年12月17日㈫13時から協会会議室において、理事13名及び監事2名出席のもと第1回理事会が開催された。

議事の内容は次のとおり。

●**令和6年度決算監査報告について**

小畑勝裕監事、内田耕一郎監事より、通帳、残高証明書、元帳、領収書及び関係書類を全て確認し、本日提出の決算書類の金額と相違が無かったことを確認した。元帳等その他内訳書などがきちんと整理されており適正に処理されていた旨報告があった。

【審議事項】

●**令和6年度事業報告及び決算報告について**

①事務局より財務諸表等に基づき令和6年度決算報告について説明があり、役員からの質疑応答後、令和6年度決算報告は承認された。

②事務局より令和6年度事業報告について説明があり、一部文言の修正を行い承認された。

●**令和7年度事業計画及び収支予算について**

①令和7年度事業計画について

事務局より令和7年度事業計画について説明があり、理事からの意見により、一部事業計画の文章の修正を行い、令和7年度事業計画は承認された。

②令和7年度収支予算について

事務局より各委員会事業の要望額で一旦は予算を組んだ旨の説明があり、理事会で検討し各委員会の予算額の調整を行い令和7年度収支予算については承認された。なお、当該予算には国際園芸博覧会事業収入分が含まれていることから、今後、1年間かけて協会全体の事業の在り方等について検討することとなった。

【協議事項】

●**卓越技能者（名人）の推薦・選定について**

卓越技能者（名人）4名の候補者について、選定された。

【報告事項】

●**2027年国際園芸博覧会の現状等について**

①2024年度契約については新しい植物が追加され、その調整を博覧会協会と何度も行い、現在、大方まとまったので、翌年1月に契約予定である。

②屋外出展（200㎡）については、先日（11月28日）、博覧会協会から大まかな出展場所や地形などを聞いたところ。今後、石井副会長を中心にスケッチを描いて進めていく段階になっている。

●**会員の現状調査について**

会員の現状調査についてブロック等の説明については意見等が無く、総会資料に同封告知し、その後、会員に一斉メールやFAXを送付し調査することとなった。

連載「植物園だより」

第２回 カカオとチョコレート

咲くやこの花館　島田（しまだ） 有紀子（ゆきこ）

◆プロフィール
広島市植物公園勤務ののち、現在は大阪市の咲くやこの花館に勤務。大阪府立大学大学院農学生命科学研究科修了。博士（農学）。ペラルゴニウム属やベゴニア属などの鉢花や草花一般に造詣が深く、特に変わり葉ゼラニウム研究の第一人者。「NHK　趣味の園芸」の番組・テキストや、各地での講演など家庭園芸ファンへの普及に日々努めている。『NHK趣味の園芸　12か月栽培ナビDo 花苗をふやす タネまき・さし木・株分け』など著書多数。

バレンタインデーに女性から男性にチョコレートを贈る習慣は日本独特のものですが、今回は世界中で愛されるチョコレートのお話です。

チョコレートの主原料であるカカオは4000年もの間、人類が育ててきた植物です。栽培されたカカオが野生化したため、本当のカカオの野生種を見極めることは難しいのですが、近年のDNAを使った研究により、南アメリカ北部のアマゾン川流域の熱帯雨林が起源という説が有力になっています。この熱帯雨林に生まれたカカオを生産できるのは赤道を挟んで北緯20度と南緯20度の間の低地に限られ、この地域を「カカオベルト」と呼んでいます。

カカオの果実

カカオは高さ10mくらいになる常緑樹で、直径１～２cmほどの小さな花を咲かせます。自家受粉しないように雌しべが雄しべよりも長く伸びています。環境がよいと年中咲き、１年間に何千もの花をつけますが、実を結ぶのはそのうちの１～３％とほんのわずか。チョコレートはとても貴重な原料から作られているのです。しかも花の寿命はたった２日で、その間に花粉を運ぶ昆虫が不可欠です。現地では小さなヌカカという蚊の仲間やタマバエの仲間などが花粉を媒介しています。そのほか、アリも自然受粉の訪花昆虫となっているようで、アリはカカオの木の高いところまで登らないので、地表近くの位置にたくさんの果実が成ります。

受粉に成功するとカカオポッドと呼ばれる褐色や黄色の果実ができ、太い幹から直接ぶら下がります。コーヒーノキやパパイヤなど熱帯地方でよくみられる幹生果は地上で活動する哺乳類が食べやすいように進化した姿です。

カカオの花

果実は受粉後約半年で熟します。厚くて堅い果実を割ってみると、長さ２cmほどの種子が20～60個ほど、ふんわりとした白い果肉に包まれて入っています。この種子こそがチョコレートの原料カカオ豆です。この白い果肉はカカオパルプといわれ、甘くて食べることができますが、種子はチョコレートの苦みのもとであるテオブロミンという物質のために生で食べることはできません。そのため動物はカカオパルプだけを食べて種子を残し、種子は散布されて広がっていきます。

さて、チョコレートの起源は紀元前2000年ごろに遡ります。中米最初の文明を築いた古代マヤ人たちはカカオ豆を焙炒してすりつぶし、ペースト状にしたものを水と混ぜ、トウモロコシやトウガラシなどを加えて愛飲していました。1400年代までに中央アメリカ全体にカカオが広がり、交易で栄えたアステカ帝国でもカカオは贅沢な飲み物として、また通貨や神々への捧げものとして使用されました。ちなみにカカオの学名は*Theobroma cacao*（テオブロマ・カカオ）、ギリシャ語で「神様の食べ物」という意味です。

1521年にアステカを征服したスペインの探検家、エルナン・コルテス一行は、アメリカ大陸の金、銀などの略奪品とともにカカオ豆やバニラといった珍しい食べ物もスペインに持ち帰りました。カカオによってつくられる飲み物は、アメリカ大陸以外では誰も知らなかった味で、スペインの人々を夢中にさせました。17世紀にはスペインとフランス王家の婚姻によりフランスにも伝わり、やがてフランスからヨーロッパの特権階級に広がっていきました。労働者階級はコーヒーを、富裕層は飲み物としてのチョコレートを好みました。さらに、18世紀になるとカカオの価格が下がり、富裕層以外の人々もチョコレートを愛飲できるようになりました。

カカオ

カカオ豆（種子）とカカオパルプ（白い果肉）

19世紀に入るとヨーロッパ各地で現在のようなチョコレートへとつながる発明が相次ぎ、工業化が進みます。オランダのクンラート・バンホーテンはココアを発明しました。「バンホーテン」といえばココアの代名詞ともなっている企業名で耳にしたことがあると思います。私も子どもの頃、牛乳に加えてよく飲んでいました。その後、イギリスにおいてこのココアパウダーの副産物として抽出されたココアバターが利用され、40℃では液状ですが、冷やすと常温で固体になり、食べると体温で溶けるという現在のチョコレートの原型が開発されました。そう、飲み物としてのチョコレートではなく、固形の「食べるチョコレート」が誕生したのです。

最後に、カカオが育つことができるのは地球上のわずかな熱帯雨林に限られますが、その熱帯雨林が今、すさまじい勢いで減少しています。加えて、カカオ農家の貧困、児童労働も問題になっています。またカカオの一生には、花粉を運ぶ昆虫、果実を食べて種子を運ぶ動物などさまざまな生物の助けが必要で、どれが欠けてもカカオはうまく育ちません。つまり、私たちがチョコレートをこれからも楽しむためには、カカオ生産の問題に対して取り組むとともに、様々な生物が生きる環境を維持し、生物多様性を保全することが大切なのです。

学校紹介

～未来の業界を担う若者たち～
京都府立農芸高等学校
環境創造科

京都府立農芸高等学校は、京都府内で唯一の農業専門高校として、昭和58年に開校しました。元々は京都府立園部高等学校農業科、亀岡高等学校農業科、農業土木科を統合して設立され、現在に至ります。学校は開校から42年目を迎え、これまで多くの農業分野の専門家を輩出しています。初期は造園土木科・農業経営科・生活科という3つの科が設置されていましたが、現在では農業生産科、園芸技術科、環境創造科の3学科が主軸となり、各学科で専門的な農業教育を展開しています。

環境創造科造園コース３年生

入学時には、「農業学科群」という枠で基礎的な学習を行い、1年次の10月からは、各学科に分かれて専門的な学習が始まります。農業生産科では作物、畜産流通、動物資源の3コースを設け、農業の生産技術に関する深い知識を習得します。園芸技術科は、生物工学、草花、野菜の3コースに分かれ、植物の生命機能を最大限に活かす方法を学びます。環境創造科では、造園と農業土木の2コースに分かれ、緑豊かな景観づくりや環境保全に関連する技術を学んでいます。これらの学科は、京都府内で唯一の学科であり、他では学べない貴重な学びの場を提供しています。

特に造園コースでは、京都の伝統的な造園業に従事できる技能を身につけることを目指し、設計から施工、管理に至るまで一貫した学習が行われます。生徒たちは、造園技能士や施工管理技士などの資格を目指して、実際の現場で必要なスキルを身につけ、即戦力となれる人材を育成しています。また、近年では技能五輪や若年者ものづくり競技大会などにも積極的に参加し、実践的な技術を競い合い、技能向上を図っています。

生徒の声

環境創造科　３年　岩田　泰旗

私は、自然や緑に囲まれて育ち、幼少期からその美しさに触れ、自然と親しんできました。中学3年生の時、家族と一緒に京都のお寺を訪れた際、庭師の方が庭の管理作業をしているのを見ました。庭師の方が、庭の景観を壊さずに、テキパキと作業をしている姿に感動しました。庭を手入れしながらも、庭そのものの美しさを保ち、むしろその作業が庭の一部となっているように見え、非常に魅力的でした。その時、私は庭園に強く魅了され、造園業に興味を持ちました。

進路を決める際、農芸高校で造園を学べることを知り、この学校に入学することを決めました。入学してから、私は2年生の造園コースに進み、基礎的な技術を学びました。特に3級技能士の資格を目指して挑戦した実技試験では、道具の使い方も最初は全く分からず、大変苦労しました。試験では、与えられた課題に対して、決められた区画内で庭を作り上げる必要がありました。最初は道具に慣れず、なかなかうまくいきませんでしたが、繰り返し練習を重ねることで少しずつ上達していきました。試験当日は35度を超える猛暑の中で行われ、非常に過酷な環境でしたが、集中力を切らさず、時間内に作業を終わらせることができました。結果として、無事3級技能士の資格を取得することができ、とても嬉しかったです。

２級造園技能士受検の様子

プロジェクト庭園完成

また、2年生の時には、クラスメイトと一緒にグループで庭を作る経験をしました。初めて本格的な庭を作ったことは、非常に感動的でした。私たちは、それぞれのアイデアを出し合い、協力して庭を作り上げることができました。この経験を通して、仲間との協力の大切さを改めて感じました。

3年生になり、私は地域連携やボランティア活動にも積極的に参加し、さまざまな経験を積みました。これらの活動を通じて、社会で求められる力を養い、自分の視野を広げることができました。また、3年生では、公共工事に必要な2級造園施工管理試験に挑戦することになり、授業や放課後の補習で学びました。試験を受けることで、現場で必要とされる知識や技術をより深く学ぶことができ、今後の仕事に大いに役立つと感じています。結果はまだ出ていませんが、自己採点では合格基準をクリアしているので、発表を楽しみにしています。

一番力を入れた活動は、「課題研究」の授業で行ったプロジェクト庭園作りです。このプロジェクトは、卒業制作を兼ねたもので、農芸高校の最大イベント「農芸祭」で披露することを目的としていました。私たち3年生造園コースは、各自がデザインした庭を選び、施工しました。私はそのプロジェクトのリーダーを任され、仲間と共に庭を作り上げる役割を担いました。

最初、作業が遅れがちで、みんなが思うように動けなかったのですが、先生と相談しながら、各自の得意分野を活かすように作業分担を行いました。無理のない目標を設定することで作業効率が上がり、最終的には予定通り、農芸祭前日に庭園を完成させることができました。農芸祭当日には、1700人以上の来校者があり、多くの方々から「素晴らしい庭だ」とお褒めの言葉をいただき、大変嬉しく感じました。この経験を通して、仲間との協力、コミュニケーションの大切さ、そしてリーダーシップの重要性を学ぶことができました。

私は、これらの経験を活かして、将来、公務員として自然を守り育てる仕事に携わりたいと考えています。特に、造園の分野から、美しい景観を守り、観光資源としての価値を高めることに貢献したいと思っています。自然を大切にし、地域社会の発展に寄与できるよう、これからも努力し続けていきます。

素描挿話。
～すてきな花達に魅せられて

㉖フクジュソウ

小岩井農牧㈱（岩手県）
足澤（たるさわ）　匡（ただし）

今回のスケッチは「フクジュソウ *Adonis ramosa*」・・・ですが、新年早々、申し訳ありません！　スケッチに書いてある学名が間違っているのです。植物に精通している方ならば、花弁と萼片の長さにより、すぐに気が付き、「学名がまちがっているよ！」と、指摘するかも知れません。スケッチに書いている「*Adonis amurensis*」は、「キタミフクジュソウ」です。人によっては、「大した間違いではないよ。」というかも知れませんが、名前を、それも正式な学名を間違えるということは、由々しき事態なのです。スケッチの中に油性ペンで書き込まれた文字を簡単には修正できず・・・、反省する日々が続いています。今の世の中、APGⅣのため？、種名、属名などが結構簡単に変わりますので、仕方ないこともありますが、できる限り間違いは減らしたいと考えています。

フクジュソウ（福寿草）は、元旦草、朔日草（ついたちそう）などとも呼ばれ、春を告げる花の代表として、昔から栽培されてきました。縁起物の植物として、梅や松などと一緒に鉢植えの色どりとして楽しまれてもきました。また、強心作用や利尿作用として使われることもありますが、毒草としても扱うこともあり、気を付ける必要があります。なぜか、福寿草なのに・・・。フキノトウやヨモギと間違えて誤食する人がいることが、とても不思議です。

ところで、日本におけるフクジュソウの自生種は４種あります。「フクジュソウ *A. ramosa*」は北海道～九州、「キタミフクジュソウ *A. amurensis*」は北海道東部のみ、「ミチノクフクジュソウ *A. multiflora*」は東北～九州、「シコクフクジュソウ *A. shikokuensis*」は四国～九州の一部に自生しています。なお、「フクジュソウ」と「ミチノクフクジュソウ」の雑種は変異が出やすいため、大輪多弁の「福寿海」、紅花種の「秩父紅」など、多くの園芸品種が作出されたそうです。

さらに、フクジュソウと言えば、飛来した昆虫を暖める花の仕組み、スプリングエフェメラルの話、レンプクソウとの話など、不思議な話題があります。いろいろと書きましたが、植物に対する興味は尽きませんね。だから、楽しいです。

連載「多肉・珍奇植物」

第11回 無骨なフォルムに愛らしい着葉が魅力、アローディア

東京都市大学環境学部教授　飯島 健太郎

◆プロフィール
東京都市大学環境学部教授。桐蔭横浜大学工学部専任講師、同医用工学部准教授を経て現職。博士（農学）。日本造園学会賞／研究論文部門受賞、東京農業大学造園大賞受賞。著書：『新しい都市緑化・ガーデニング材料／多肉植物』（ソフトサイエンス社）、『サボテン大好き』（講談社）、『多肉植物の名前400がよくわかる図鑑』（主婦と生活社）、『サボテン全書』（監修、グラフィック社）、『多肉植物全書』（監修、グラフィック社）など。

どちらかと言えばマイナーながら、ビザールプランツ各種の陳列の角に厳つい存在感でマニアに愛好されているアローディアを紹介したい。ディディエレア科アローディア（*Alluaudia*）属の落葉性の高木もしくは灌木であり６種があるとされている。年輪は形成されないので樹木とは言えない。原産地は主としてマダガスカル南西部であり、特にフトカナボウノキ（*A. ascendens*）とアリュウボク（*A. procera*）は乾燥地生態系を構成する生物種群や環境条件が類似するような地域の一つであるマダガスカル有刺雑木林の象徴的な存在である。幹は貯水組織となっており、乾季には落葉する。雨季になると幹から直接葉を茂らせるのが特徴である。突出するトゲは肉刺であり、樹皮が発達したものである。現地では木材として利用されており、大きな個体を中心に個体数が激減し深刻な問題となっている。属名はフランスの昆虫学者シャルル・A・アリュオーが由来となっている。この属を含むディディエレア科はサボテン科に極近い系統とされ、これを台木にしてサボテンを接木出来ることが知られている。

写真１　アリュウボク

わが国での趣味的対象としては、多肉植物のトゲもの、あるいはイモホネ類のマニアのコレクションのなかに、あるかないかといったマイナーな存在であった。ビザールプランツ人気が加速した平成末期にかけても陰の薄い存在であったが、令和を迎える前後にビザールプランツの対象が拡大多様化するなかで一目おかれるようになった。グーグルトレンド機能による検索傾向において、「アローディア（検索ではアルアウディア）」や「亜竜木」と入力すると、同じころに際立った突出が認められる（図）。僅かに流通していたアリュウボク（写真１）に加えて、特徴的な数種も加えビザールプランツを冠して登場した。誤解を恐れずに言うならば、他のビザールプランツも含めそれまで白いプラ鉢に植えられ地味な存在であったものが、黒色の浅鉢、角鉢、トールポットに植えられると見違えるような風情で園芸マニア以外までもが魅了される。アローディアもこの流れにのっており、ヤフーや楽天などの通販サイトで昨今購入できるアローディアの大半が黒色の鉢ものである。その代表的な種類であるアリュウボクは、トゥリアラ州の沿岸部に産し原産地の成樹は高さ20mにも達する。成長期には、刺だらけの茎に小判型の葉を出す。生長点の葉は上向きに展開するが、その後幹から直接生える葉は縦に並ぶ（写真２）。強光線をかわし朝夕の穏やかな日差しの方向に向いていると考えられている。「亜竜木」のほか「二つ葉金棒（フタツバカナボウ）」という和名が付けられているが、前者のほうが一般的である。本属中の普及種であり、成長旺盛で根もよく発達するなど丈夫であり、成長期は屋外で雨ざらしにした方が伸長スピードも高まる。次いでアローディア・モンタグナッキー（*A. montagnacii*）も昨今流通するようになった（写真３）。トゥリアラ州のイタンポロ近郊のかなり限定された石灰岩台地に自生し、ほとんど分岐せず成樹は高さ20mに達する。新梢には小判型の葉を出すが、アリュウボクよりも太く整然と並ぶ刺だらけの茎から生ずる葉は僅かにハート型になる。「刺二つ葉金棒（トゲフタツバカナボウ）」や「刺長二つ葉金棒（トゲナガフタツバカナボウ）」という和名が付けられている。本属としては珍しく枝を多く生じて横臥する種としては、アローディア・コモサ（*A. comosa*）がある（写真４）。トゥリアラ州のメナランドラからマノンボの乾性林に自生する。成樹は高さ数mの潅木で、新梢には小判型の葉を出す。細い刺だらけの茎からでる葉は多くの場合小判型で１枚ずつ着き、枝は地際で分岐して茂る。「姫二つ葉金棒（ヒメフタツバカナボウ）」や「魔針地獄（マシンジゴク）」という和名が付けられている。

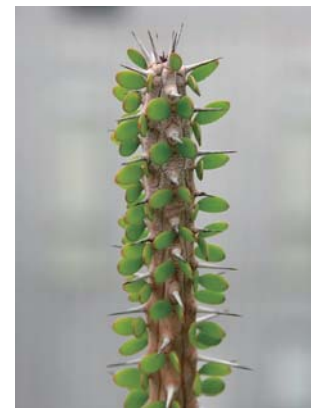


写真２　アリュウボクの縦に並ぶ葉

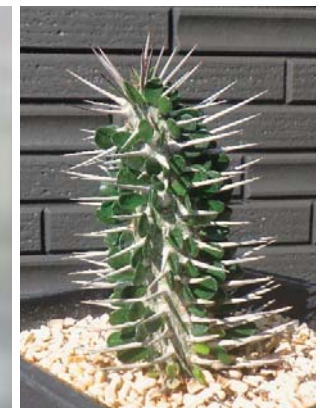


写真３　アローディア・モンタグナッキー

写真４　アローディア・コモサ

アローディアはわが国の植物園の温室において数メートルに生育した株をしばしば目にすることはあるが、マニアが積極的に愛好、収集する対象ではなかった。それでも従前から大型のユーホルビアとともにアリュウボクの大株がサボテン生産農家でつくられていたり、カタログにも「亜竜木」が掲載されその挿し木のしやすさから10～20cm程度の小苗が通販されていた。昨今のビザールプランツ対象の拡大多様化に伴い、ガーデンセンター、ホームセンター、ビザールプランツ専門店の販売に加え、EC サイト用にも先の３種が３～４号鉢程度のサイズで生産されている。成株に見られる本来の長大な姿ではなく、寸詰まりの姿であったり先端を止めて枝を吹かせた仕立物なども見られる。

本属は種類も少なくコレクション意欲を継続しにくいものの、その形態学的な面白さによる生態的学びや個性ある仕立て方による観賞を推進するなど、一過性の人気に留まらないようにしたい。

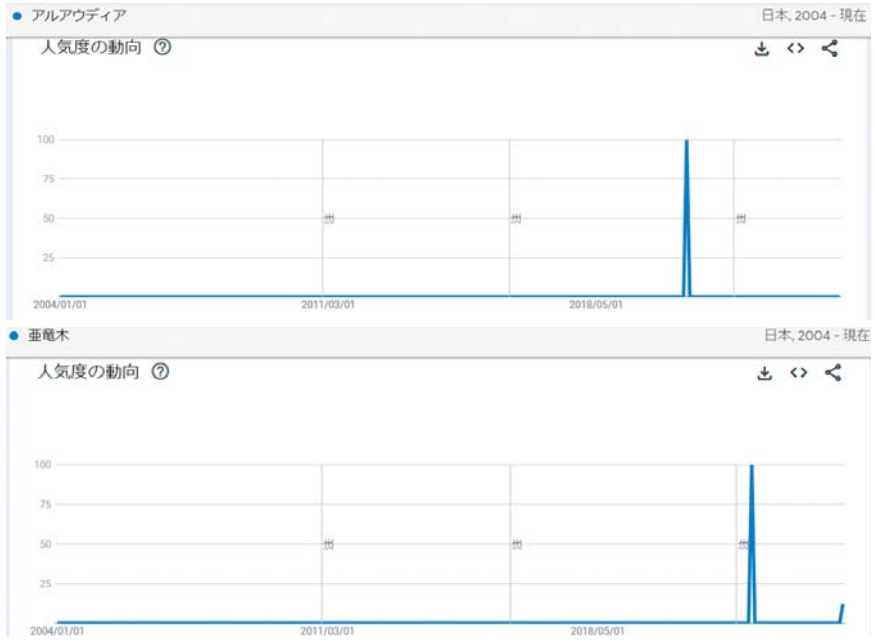


図　グーグルトレンド機能による「アルアウディア」、「亜竜木」の検索傾向
注）「アローディア」は関係のない人名も抽出してしまうため、ここでは類似の呼び名である「アルアウディア」とした。

日本列島植木植物園　ナショナルプランツ　コレクション※

「コバンモチ」
ホルトノキ科ホルトノキ属

問い合せ　大分植木㈱　二村貞治　☎097-541-1047

暖地に生え、高さ５～７ｍになる。５～６月、葉腋から総状花序をだし、淡黄色の小さな花を開く。葉は常緑で楕円形から長楕円形。小判のような形をしていることからこの名がついた。古い葉が落葉する前に紅葉して緑の中でよく目立つ。ホルトノキの葉に似ているが、広く丸味があり、葉柄が長いことから区別できる。果実は長さ約１cmで秋から冬に黒紫色に熟す。

※ナショナルプランツ　コレクションとは、世界的に価値のある植物の種・品種等を属のレベルで集め、植物の多様性の維持や希少種・絶滅危惧種の保護に役立てる事を目的としたコレクションです。

川原田　邦彦
確実園園芸場（茨城県）

日本人の暮らしは豊かになったが、それは表面だけのことで心のゆとりはなくなり、安らぎが見られなくなってしまいました。民族行事は忘れられ、どんどん失われていきます。「若菜の節会」は五節句の一つで、七草粥を食する正月７日の節句。「芹(せり)なずな御形(ごぎょう)はこべら仏の座(ほとけのざ)、鈴奈須々代(すずなすずしろ)これぞ七草」。年の初めに、先人が残してくれた、自然に親しみながら体調を整え、健康を守るための生活の知恵を現代に活かし、見直していくのも意義深いことと思われます。

●七草粥の起源

２千余年前の紀元前150年ころに漢の王室行事として行われたと伝えられる「春盤」に源流をたどるものといわれています。年頭にあたり、皇帝の無病息災を祈願して七種の菜を入れた羹（あつもの）を食べました。これは王朝が変っても代々継承されてきて、唐の時代に遣唐使が日本に伝えたものです。そして奈良朝の薬膳料理として採用されたものと考えられます。

平安朝（790～1191年）の初め寛平２年（889年）、「延喜式」が編纂されました。その中に、主永司が正月６日、御所に近い七野から七種の菜を摘み、７日の朝粥を宇多天皇に献じたことが記録されています。「公事根源」にも醍醐帝の延喜11年（911年）正月７日、御院より七種の若菜を供すと記されています。

材料

七野と七菜は、

薺（ナズナ）内野、繁縷（ハコベラ）北野、芹（セリ）柏野、菁（アオナ）紫野、御形（ゴギョウ）上野、酒々代（スズシロ）平野、仏座（ホトケノザ）蓮台野。

ハハコグサ

ナズナ

●七草粥の普及

公家で行われていた七草粥が江戸時代になると大名や旗本の間でも行われるようになり、それが出入りの町家へ広がり、さらに庶民の間で行われたのは中期になってからと考証されています。

陰暦の正月は寒さも厳しいですが、春の草も芽吹き始めます。江戸の街並みも一歩外に出ると七草はいたるところに生えていました。当時の人は、誰でも有用な草木の知識（毒も含め）は常識として持っていました。６日に七草を摘みに出かけ、夕方には家族一同まな板の前に揃い、家長の包丁に合わせて、スリコギ、火箸、火吹竹などをそれぞれ手に持って、

唐土の鳥が　日本の土地に　渡らぬ先に　七草ナズナ　包丁でたたく　トントントン　七草粥食べて無病息災祈る。

とにぎやかに合唱しながら七草を刻み、翌朝の準備をしたと想像できます。ただし、七草粥が地方に広がるのはかなり時間が経過してからでした。やはり地方の暮らしは余裕がなかったと考えられます。

戦前の東京では季節の風物詩として、６日の夕方には家々から聞こえるその声が道路まで伝わってきたといわれています。

戦後は生活苦に追われて東京人も四散し、出稼ぎの地方人と入れ変ったりで、生活様式も大きく様変わりし、生活が安定してからも久しく復活することはありませんでした。

さらに戦後40年を経過するころから、スーパーなどで農家に委託して、形だけの七草として売り出すようになっています。

●七草籠

江戸の粋人、佐原菊塢が文化２年（1805年）、向島に梅屋敷を開設し、のちに百花園と改称されます。この辺りは江戸の人達の行楽地でありました。加藤千蔭（歌人）、村田春海（歌人）、島田鵬斉（儒者詩人）、大田南畝（蜀山人）、大窪詩佛（儒者詩人）、抱一上人（画家）、川上不白（江戸千家流祖）、千柄菊旦、谷文晁（画家）等、当時の名高い文人が常連として来ています。

文政12年２月13日、11代将軍徳川家斉、弘化２年１月12日、12代将軍徳川家慶が御成りになったのをはじめとして、御三家、諸侯が来遊しており、その繁盛ぶりがしのばれます。将軍の御成りを記念して、今戸の土鉢に七草を寄せ植えして、竹籠に入れたものを将軍に献じることが通例になっていました。

明治になると菊塢は、七草籠を百花園の名物にして売り出し、好事家の人気を集めることになります。師走には、門前に行列ができたといわれています。

戦後は都市公園に変わり、まもなく七草籠も復活しますが、毎年の準備する数にも限度があり、入手は困難だったようです。

現在はデパート、スーパー等が埼玉県鴻巣の農家に委託した即席ものや、それらしく見えるものを大量生産して売り出しています。東京近郊では、自然の七草は見つけにくくなっています。

●七草

［セリ］

セリ科セリ属、この中では唯一の日本のものです。川畔や田んぼの湧水地では普通に見られ群生します。古くから早春の芹摘みとして親しまれてきました。現在は栽培する農家が多く、茨城県北浦町（現行方市）は名産地となっています。千島、サハリンからインド、オーストラリアまで広く分布しています。水蘄、芹子（万葉集）、制利（日本書紀）、ツミマシグサ、ネジログサなどと呼ばれ、競り合って育つことが語源になりました。中国では紀元前からハーブとして利用しています。ちなみに欧州では未利用です。ビタミンA、B、B２、C、D、葉酸、鉄分の含有量が多く、アルカリ性食品として広く知られています。血液の循環、リュウマチ、神経痛の予防薬、酒毒に効果があります。お浸し、鍋物、天麩羅などで食します。

セリ

斑入りセリ

［ナズナ］

アブラナ科アブラナ属、北半球の旧大陸に広く分布（雲南原産か）、有史以前の帰化植物といわれています。農道などに好んで生えます。薺、撫名、浄腸草、三味線草、ぺんぺん草、チロリン、ガラガラなど実の形からの名前が多く、韓国名「ナジ」から転化したナジの菜→ナズナと考えられています。前漢時代から薬膳料理の中心になっています。タンパク質（ほうれん草の２倍）、カルシウム（同３倍）。毒消し、利尿、止血薬として効果があります。お浸し、汁の実、天麩羅、和え物などで食します。

ハコベラ

［ハコベラ］

ナデシコ科ナデシコ属、世界中に広く分布します。原産地は欧州か中国。有史以前帰化植物。繁縷（ハコベラ）は小輪の白い花が早期開花することから、朝開（アサシラケ）、小鳥の飼料にすることからヒヨコグサ、スズメグサの名前があります。催乳、浄血、脚気、瘡傷、歯痛、整腸などに効果があります。ちなみに平安貴族の歯みがき、ハコベ塩は有名な史実です。お浸し、和え物、汁の実、天麩羅などは癖がなくおいしい。

［ホトケノザ］

キク科ヤブタビラコ属、コオニタビラコのことで、シソ科のホトケノザとは、まったく別種です。中国中部の原産で、有史以前帰化植物。日本では中部地方以南に多く自生がみられます。田んぼなどの乾かない場所に秋に生えます。初夏に開花して夏に枯れる二年草で、地面に張り付くように生え、小さい黄色の花が咲きます。ホトケノザは古名で無毛菜（カワラケナ）、田平子、鶏腸草などと呼ばれます。風邪、肋膜、鳥の目などに効果があります。和え物、お浸し、汁の実、天麩羅など広く食用になり、胡瓜の味がします。九州での利用が多く知られています。

七草でのホトケノザ（コオニタビラコ）

ホトケノザ（正式）

［スズナ］

アブラナ科アブラナ属、カブのことです。地中海沿岸の原産で、中国を経て渡来した有史以前帰化植物。蕪菁（かぶら）、阿乎（万葉集）、菁（アオナ）、菘（アオナ・古事記）などと書かれています。古代は葉の部分を食べましたが、のちに肥大した胚軸部を利用するようになり、その形から鈴奈「スズナ」と呼ばれるように変わりました。野菜のなかでは、けたはずれに栄養価の高いものです。春に黄色い菜の花が咲き、キャベツやハクサイもこの仲間です。また、各地域で独特の品種もできています。スグキナ（京都）、内野菜（京都）、聖護院蕪（京都）、天王寺蕪（大阪）、大蕪（青森）、日野菜（滋賀）、赤蕪（山形）、鷹菜（長崎）、野沢菜（長野）、津田蕪（島根）、小松菜（東京）等々。

カブ（スズナ）

［スズシロ］

アブラナ科ダイコン属、ダイコンのことです。欧州原産で、中国を経て渡来した有史以前帰化植物。萊菔、羅葡、於朋泥（日本書紀）、胚軸と根部の合体した部分を食用にしますが、ジアスターゼの含有が多いので胃腸に良いです。ニコチン毒、祛痰、咳止めなどに効果があります。日本を代表する野菜でカブ以上に各地で独特の品種が育成されており、世界の野菜の中でも最も変異品が多く栽培されています。桜島大根の巨大種から守口大根の細長い種まであります。またダイコン属の花は白または淡紫色なので、カブと容易に区別できます。

ダイコン（スズシロ）